University
Current
Review

ISSN 0288-1748 2022(令和4)年 3月20日発行［隔月刊］

［特 集］
大学職員のワークスタイル
―ニューノーマル時代の働き方を考える―

大学時報

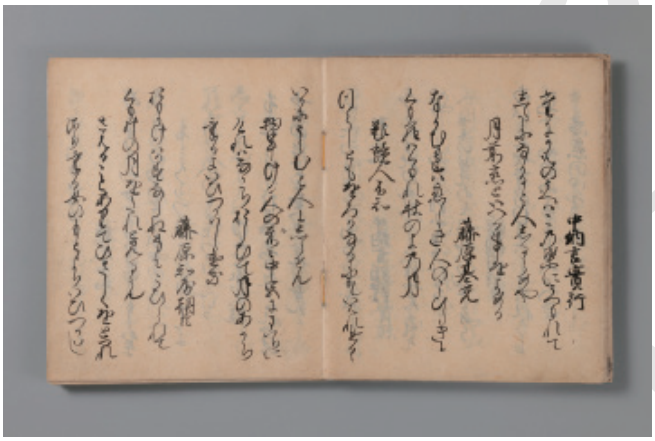
NO.403
2022.03

日本私立大学連盟

だいがくのたから
Thesaurus Universitatis

ノートルダム清心女子大学

同『金葉和歌集』を納める
外箱（左上）、内箱（右中）、表紙（左中）



伝二条為明筆『金葉和歌集』

特殊文庫書庫内

ノートルダム清心女子大学特殊文庫所蔵
伝二条為明（ためあきら）筆『金葉和歌集』

ノートルダム清心女子大学の特殊文庫は、国文学科（現日本語日本文学科）創設の際に設置された半世紀以上の歴史を持つ貴重書庫である。特殊文庫は、江戸の歌人・国学者の黒川春村（1799－1866）と養子黒川真頼（1829－1906）、孫黒川真道（1866－1925）ら黒川家蔵書の和歌関係を中心とする書籍をおさめる黒川文庫、本学教授であった国文学者・歌人正宗敦夫（1888－1958）の収集した古筆・稀少本をおさめる正宗敦夫文庫を所蔵する。さらに、学術・教育の発展のため古典籍の収集・保存に努めており、現在は約5000冊もの貴重な古典籍が所蔵される。

『金葉和歌集』は白河法皇（1053－1129）の命により源俊頼（1055－1129）が撰進した5番目の勅撰和歌集である。『金葉和歌集』は完成に至るまで院の下命による2度の差し戻しと撰集方針の変更があり、撰進時期の差異により伝本は初度本・二度本・三奏本の3つの形態に大別される。さらにそれぞれの撰集途上に転写されたと覚しい総歌数の異なる多種の伝本が伝わっているため、『金葉和歌集』の研究は、伝本相互の比較検討により進められてきた。特殊文庫には13点もの古写本が揃っており、本学資料を欠いては『金葉和歌集』の学術的な理解は得られないほどの充実度を誇る。

今回紹介する伝二条為明筆『金葉和歌集』は最も流布した二度本の中でも精選された最終稿本系の伝本と考えられており、日本文学研究を為す上で欠かせない『新編国歌大観』『新日本古典文学大系 金葉和歌集・詞花和歌集』の底本に採用され、拠るべき本文として広く参観されている。

University Current Review

大学時報

2022.03／NO.403

CONTENTS

だいがくのたから　ノートルダム清心女子大学

大学点描　東海大学

巻頭言　建学80周年を迎えて　山田清志

視点　人と人、地域・産業・世界をむすぶ人材育成
—一拠点総合大学の利点を生かした教育—　黒坂光　10

座談会　学園祭のいま
齋藤勝／山本憲吾／福田淳子／新井喜雄／（司会）大谷奈緒子　16

特集　大学職員のワークスタイル
—ニューノーマル時代の働き方を考える—

ワークスタイル改革の取り組みと今後の展開　和田満　32
フレキシブルワーク制度の今後の展開　冨来清貴　34
若手・中堅職員による働き方改革プロジェクトの推進
—上智学院・働き方改革宣言の策定とその取り組み事例—　千野雅裕　40
選択肢の気付き・許容—フリーアドレスの効果として—　内野匡貴　44
職員の働き方を考える
—「働き方改革プロジェクト」2年間の取り組みとこれからめざすところ—　井上真由美　50
オフィスが人を育てる—津田塾大学のオフィスリニューアル—　菊池太陽　54

ずいそう　学園の進む道　長坂悦敬　60

小特集　しょうがい学生の大学生活と支援の実際
包括的学習者支援体制と障害学生支援　66
68
70

表紙：ヨモギ

キク科ヨモギ属の多年草の総称。世界に広く分布し、砂漠にも生育します。洋の東西を問わず古くから食用や薬用とされ、特有の香気があることから厄除けとしても用いられてきました。日本では春先に出る若葉を、草餅や草団子に入れ、美しい緑や香りとともに味わいます。

＊表紙デザインでは教育・成長・向上を植物になぞらえ、1年ごとにさまざまな種・葉・花・実を紹介します。今年度は葉のシリーズです。

—多様性と包摂を目指す支援体制の構築—　ヒューバート眞由美　76
変えないために変えていく　山田康裕　78
コロナ禍における障害学生支援　村田淳　84
オンライン授業下の聴覚障がい学生支援　西出稔行　88

私の授業実践～教育現場の最前線から～

ゼミにおける実践的研究
—スペイン語劇を通したパフォーマンス分析の現場から—　小阪知弘　90

加盟校の幸福度ランキングアップ《コーヒー編》

産官学連携による新たな価値の創造　藤原美紀　92
コロナ禍でのゼミ生の模索と挑戦 —神保町コーヒープロジェクト—　島田剛　94
一杯のコーヒーから始めるSDGs　尾崎博美／高崎春華／桜井愛子　96

クローズアップ・インタビュー

國學院大學人間開発学部健康体育学科助教、振付家、元プロフィギュアスケーター
町田樹さんに聞く　（聞き手）外川智恵　104

新会員代表者紹介　専修大学　105

執筆者・出席者のご紹介（掲載順）　107

私大連ニュース　108

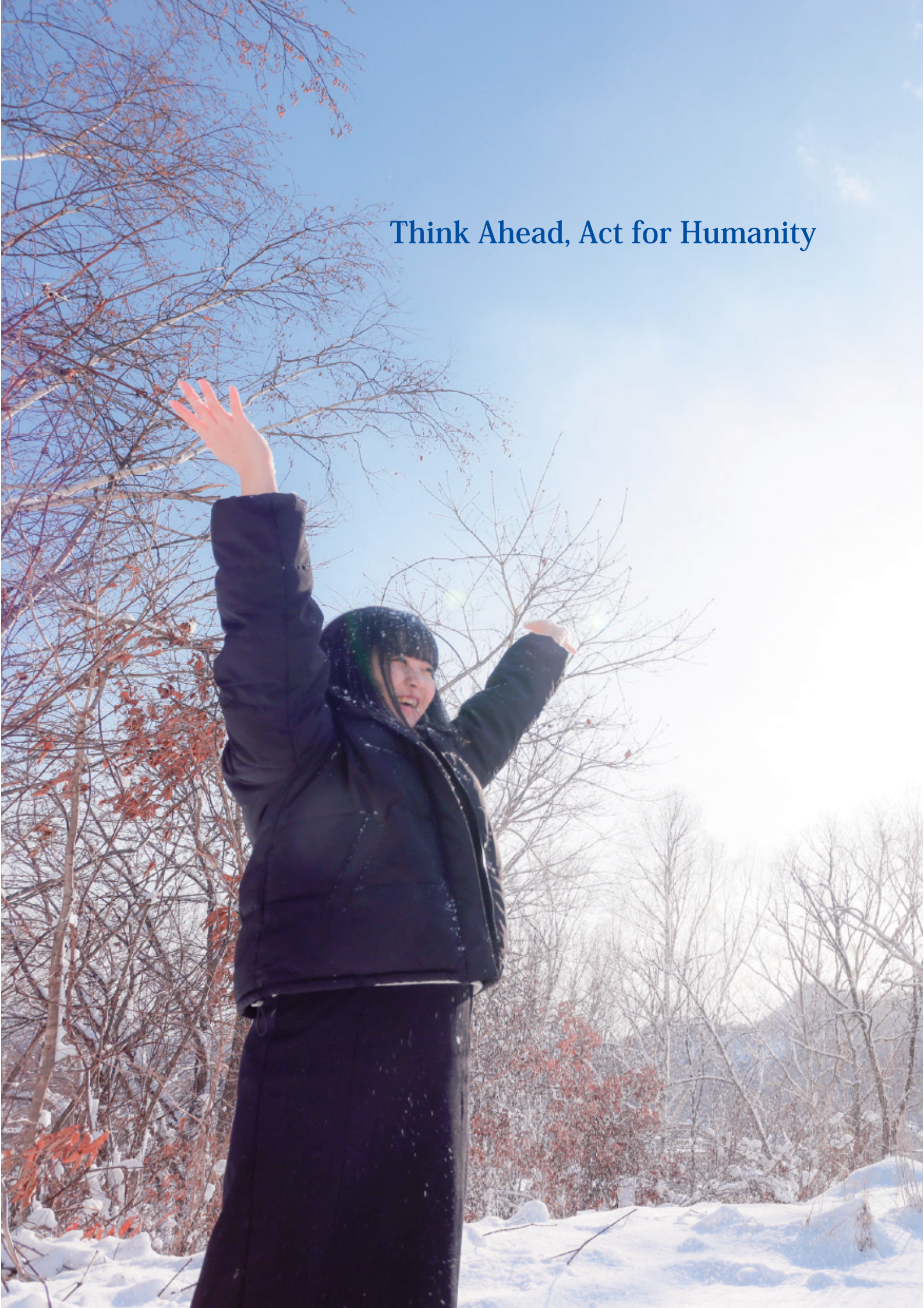
年間総目次　114

編集後記

大学点描

TOKAI
UNIVERSITY

DINER
Retro



Think Ahead, Act for Humanity

University Current Review

大学時報

2022.03／NO.403

建学80周年を迎えて

山田 清志　東海大学学長

２０４２年の建学１００周年に向け、80周年を迎える２０２２年は東海大学にとって重要な年となる。全国５キャンパス７校舎とし、６つの新設学部を加えた23学部62学科・専攻となる体制への”進化“は、再び「先駆け」である大学を目指すための宣言でもある。全国にキャンパスを有する総合大学の強みを活かし、「どこでも」「誰とでも」学び合う経験と人脈形成の場を提供し、社会課題の解決に資する人材を輩出し続けたい。

視点

人と人、地域・産業・世界をむすぶ人材育成

―一拠点総合大学の利点を生かした教育―

黒坂 光
京都産業大学学長

1. 建学の精神

新型コロナウイルス感染症が国内で初めて確認されてから、すでに2年以上が経過した。新型感染症は世界を席巻し、人々の日常生活のみならず経済、社会を変容させるほどの大きな影響を及ぼした。大学教育への影響も大きく、緊急事態宣言発令時には、ほとんどすべての授業を遠隔授業で行うことを余儀なくされた。予期せぬウイルス感染への対応で、準備が整わぬ中の遠隔授業であったが、科目によっては遠隔授業も十分な教育効果があり、さらに時間と場所の制約からの解放という対面授業にはない利点も認められた。アフターコロナの大学教育においても、対面授業と遠隔授業を併用する事は間違いない。しかし、遠隔授業は知識を正確、迅速に伝達することはできても、人との交流、人と社会の交流などのコミュニケーションを基盤とする教育には適さない。多くのことを吸収し、人生の進むべき道を決めていく20歳前後の学生が学ぶ大学は、専門知識の修得のみならず、人間的な成長を促す場でなくてはならない。大学には、学生が友人、教職員との楽しい語らいや議論を通じて、精神的、人格的に成長して社会に巣立っていくための教育を行う責務がある。

京都産業大学は、1965年に創設され、今年で57年目を迎えた。本学は、「将来の社会を担って立つ人材の育成」を目的として、建学当初より専門知識の修得のみならず、キャンパス内外での様々な活動を通じた教育を行ってきた。建学の精神においては、育成すべき人材を「高い人格を持ち」、「社会的義務を果たし」、「絶えず変動す

る情勢に関して十分な知識を持ち、正しい情勢判断ができ」、「国内、国外の職域を問わず、全人類の幸福のために寄与する人間」と定義している。このように、本学が育成すべき人材は、専門的知識を有する事は言うに及ばず、地域・社会情勢を理解し、国内外を問わず、課題解決に向けてグローバルな視点で活躍できる人材である。また、大学の名称が示す通り、産学連携を大学の重要な目的の一つに掲げている。本学は開設時から、大学が象牙の塔に閉じこもることなく、常に現実の産業界と密接な連携を保ち、理論と実践とを融合した教育を行い、卒業後に実社会で活躍できる能力を身につけ、産業界の発展に貢献できる人材の育成を目指してきた。本学開設当時、ほとんどの大学が基礎研究を重視する中で、本学は時代を先取りし、一貫して社会・産業界との結びつきを模索し続けてきたのである。

本学は、創立50周年（２０１５年）を機に、変化の激しいこの時代において建学の精神に掲げる人材育成を実現するために、理想とする大学像を「むすんで、うみだす。」、人材像を「むすぶ人」と定めた。本学は、大学名にある「産業」を「むすびわざ」と読み解き、「むすぶ」をキーワードとして、「学問」と「社会」「企業」「自然」を、「京都」と「日本・世界の諸地域」をむすび、多様性の中から新しい価値を創造することを大学の目指すべき姿とした。大規模大学においては、複数のキャンパスを持ち学部が分散していることが多い中で、京都産業大学は文系・理系を含めた10学部と全ての関連施設が京都市内の上賀茂の地に集約した一拠点総合大学である。多様な学生が一堂に集うキャンパスの多様性を活用して、「人と人をむすぶ」ことで学生の成長を促し、さらに「人と地域・産業をむすぶ」ことで地域・社会・産業における課題を理解し、「人と世界をむすぶ」ことでグローバルに活躍し、将来の社会を担って立つ人材にまで育成していくことを目的として教育を行っている。以下に本学の人材育成の取り組みについて解説する。

2. 人と人をむすぶ

一拠点総合大学である本学のキャンパスには、海外からの留学生を含む約１５０００人の全ての学生が集う。緑に囲まれた上賀茂の歴史にゆかりあるキャンパス［写真1］は、自ずと「人と人をむすぶ」場となり、学生は意識せずとも学部、出身地域、国などが異なる多様な考え方や

文化に触れ、意見を交換し、議論を交わすことで切磋琢磨し成長することができる。

講義では学生間の活発な交流が見られる。特に、全学部に提供する共通教育科目では、多様な学部の学生が同じ科目を受講することとなり、1年次から異なる視点の考え方に触れることができる。また、本学では一拠点総合大学の利点を最大限に生かし、初年次において「大学の歴史と京都産業大学」を開講し、京都産業大学の成り立ちと教育の目的を教授している。新入生が入学直後に、大学への帰属意識を高め、4年間の学修のねらい、さらに大学が育成する人材像を認識することは、以後の学修に極めて重要である。

[写真 1] 10 学部を集約した京都産業大学キャンパス全景

また本学は、他学部の専門教育科目を履修することを認め、修得した単位を卒業要件単位として認定できる融合教育科目を開講している。学部間の教育の壁を取り払い、多様な科目の受講を可能にするものであり、学生が多角的な視点を持って学習を進めるのに有効なカリキュラムである。

このように一拠点総合大学である本学では、多様なカリキュラムを編成することが可能となり、さらに必然的に講義室は異なる学部の学生の交流の場となる。同じ講義を受講しても、学部の専門性により問題の捉え方、解釈の方法は異なる。専攻分野の異なる学生が交流する環境を作り出すことで、多角的に物事を考え、様々なアプローチから問題解決をするための能力を初年次から涵養することができる。このような複眼的思考・能力は、今日の複雑化した社会における課題解決にとって極めて重要である。新型コロナウイルス感染症、地球温暖化、エネルギー問題などの複雑な要素が入り組んだ課題の解決には、様々な分野からの知識の集合知が求められる。本学のキャンパスでは、多様な学生同士の交流に基づく意見交換・議論を通じて学生は問題解決のための複眼的思考力を身につけるのである。

3．人と地域・産業をむすぶ

本学は座学を中心とした学びより得た知識・理論知を、地域社会や産業界を見聞し、現実の課題を知り、課題解決を図ることにより実践知にまで高める教育システムを構築している。

本学は、キャリア教育において先導的な役割を果たしてきた。学生が社会や企業の現場に出て社会を生き抜く力を育成するために、企業や行政との連携のもと実践的な問題解決力を育成する日本型「コーオプ教育」を開発し、それをもとにして独自のキャリア教育を実践してきた。

本学のキャリア教育の特徴は、単なる就職支援ではなく、建学の精神の実現を目的とした教育課程の中に編成されていることにある。キャリア関連科目は、共通教育の中に「キャリア形成支援プログラム」として体系化した科目群として配置されている。このプログラムには、「導入・接続教育科目群」と「産学協働教育科目群」がある。自己を知り、キャリアを考える「導入・接続教育科目群」では、初年次の入学直後の学生に対して「自己発見と大学生活」を開講している。半数を超える入学生が受講するこの科目では、自己を知り、キャリアを意識した大学生活を送ることの重要性を学ぶ。「産学協働教育科目群」では、地域社会・産業界との連携を通じて現実の社会の問題の理解と解決に取り組む。2年次以降に開講する「自己発見とキャリアデザイン」では、人と社会の交わり、自己のキャリアプランと社会で果たすべき役割について学び、これらの学修内容をＰＢＬ(project based learning)科目、インターンシップ科目により実社会を経験することで実践知にまで高めていく。ＰＢＬ科目では、まず座学での綿密な事前学習を行い、その後に企業や行政の現場に複数回、あるいは長期にわたり出向くことにより、企業や行政からの課題にチームで取り組み、社会とのつながりや働くイメージを実感し、さらにその後で座学で学ぶことを繰り返す。このように、本学のＰＢＬ系の科目は、キャンパス内と外での学びを組み合わせることを特徴とする。加えて、インターンシップ系の科目を履修することにより、理論知を実践知にまで高めていく。インターンシップ系科目では個別の企業、行政の現場に入り、社会の問題点を実感するとともに、自己の課題についての気付きも得られる。インターンシップは単なる就業体験ではなく、入念な事前学習及び事後学習を行い、さらに企業からのフィードバックも

得て、次年度のカリキュラム編成の改善へとつなげていく。

以上の全学的なキャリア形成支援プログラムに加えて、3分の2ほどの学部では学部の独自のキャリア支援科目を開講している。高度に専門化するこれからの社会では、より専門的なキャリア意識と課題解決能力を持った人材が求められており、その育成には専門分野に特化したPBL等の教育が必要になる。

以上のように、本学は学生の進路指導に際して、「キャリア形成支援教育科目」を単なる就職支援ではなく、建学の精神に基づく人材育成のための教育プログラムと位置づけて教育を実践してきた。プログラムを通じて、将来の夢や進路の実現に向けての実践的な能力と、就業および社会貢献の意識の涵養を目的として、入学から卒業に至るまで一貫したキャリア教育を実践している。その取り組みの結果として、本学は開設以来、就職に強い京都産業大学として評価を得ている。

4. 人と世界をむすぶ

10学部を集約する本学では、留学生が少ない学部の学生もキャンパス内において留学生と触れ合うことが可能になる。キャンパス内には、学生が主体的に学べる学習空間として、それぞれ特徴のある4つの「コモンズ」を設置している。なかでも「グローバルコモンズ」は、京都の持つ国際性を取り入れた空間デザインの中で、異文化理解を深め、生きた語学が学べる施設である[写真2]。グローバルコモンズでは、外国語学習や留学に関する資料を閲覧したり、専門スタッフによる個別英語学習支援を受けたりできる。また留学生との交流イベントも頻繁に開催されており、世界とつながり、海外の言語や異文化との交流も可能であ

[写真 2] グローバルコモンズにおける留学生との交流

る。また、本学への留学生に対して、留学生が日本に慣れ、勉学に集中できるよう、在学生がサポートを行うバディ制度を設けている。バディは日常生活のサポートも含め、学業の良きパートナーとして留学生と交流を深め、その交流を通じて語学力や異文化理解力を高めることができる。これらの取り組みを通じて学部の枠を超えて、日本人学生と留学生の交流の機会を設けている。

また、本学は全ての学生に対して海外留学を推奨している。世界各国の交流協定校への「交換・派遣留学」に加えて、学生が留学する大学を選定する「認定留学」など、自由度の高い留学プログラムを用意している。国際社会の問題解決に挑む国際関係学部においては、海外の実態に触れ理解することを重視しており、1年次からの海外での課題調査を必修化している。その他の学部においても、学部独自の留学プランを備えており、学生と海外をむすぶ取り組みに鋭意取り組んでいる。これらの留学プログラムを活用して、在学生の10人に1人以上が留学を経験している。コロナ禍の現在、留学の実施は困難な状況にあるが、留学プログラム再開に向けて準備を進めている。

おわりに

本学は、建学の精神に謳う「将来の社会を担って立つ人材の育成」、さらに大学の名称が示す「産学連携」を目的として教育と研究を行ってきた。この目的を達成するために、開設以来一貫して、「人と人」、「人と地域・産業」、「人と世界」をむすび、本学が拠点とする京都上賀茂のキャンパスから「学問を外に伝え、地域・産業界との連携を進めていくこと」を使命としてきた。キャリア教育、充実した海外留学プログラムを活用して、学生は教室の内なる学びを外への学びにつなげて、幅広い視点を持って学修を進めている。文系・理系の学部が一つのキャンパスに集う環境は、学生同士の刺激を促し「前向きでバイタリティーのある人材を輩出する大学」としての評価をいただいている。

大学の建学の精神とこれまでの歩みを踏まえ、大転換期を迎えた現代に、京都産業大学は改めて建学の精神に定める「将来の社会を担って立つ人材の育成」という目的に立ち戻り、「一拠点総合大学」や「産学連携」など、京都産業大学ならではの特色を生かし人材の育成に注力していく。